
変愛小説の上で

Mr.T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変愛小説の上で

【Nコード】

N2812S

【作者名】

Mr.T

【あらすじ】

携帯小説を忌み嫌う小説家もどきの物語

小説家のような存在（前書き）

拙い文章表現しか持たない私が書く小説もどきです

小説家のような存在

インターネット……。

この一見全く紙媒体と関係のないメディアに、最近では”小説”という存在を確認することができる。一昔前の人間が紙媒体に書いていたことを、最近の者は倣^{なら}うこともなく電子媒体を介して表現しているのである。十人が十人小説を書くわけではない、書きたい者が書くのだからこそ、紙に書くものであった小説という存在。その小説が現代では手軽に公開の場を設けられ、そのことにより小説を書く者が多くなった。メリット・デメリットが内包されているこのインターネット投稿小説。ここではインターネット小説の事を”小説のような物”という区分で定義をさせて頂きたい。

さて、この”小説のような物”の中に携帯小説という分野が存在する。その携帯小説をひと際嫌悪している一人の青年がいた。青年は、読書家であり”小説家のような者”であった。今からその青年についての日常を書き綴っていく。お暇な方がいらしたら、少しだけのぞいていただければと思う。

10月下旬の外気は少し肌寒く、木枯らしは窓をたたくようにして吹いている……。なんて風情の効いた情景はこの部屋には介在していない。古き良き民家にはそのようなガタガタと震える窓等が備わっているのであるが、私の仮住まいに、そのような物は存在していない。

「ふう。」

思わずため息がでる。小説や昔の日本書物等にでてくるこの男の求める情景は、残念ながら文章の中にだけ存在している。

「明日は休みか……。」

誰に聞かせるでもなく、独り言が出る。最近独り言が増えたなと
あかつかせいじ
赤塚清二は思った。

清二は大学生である。といってもやりたいことはなく、昨今の不況を否が応にも体で感じてしまう清二にとって、就職がこれからの自分にとってどうしても建設的に見えてこないのである。現在はバイトをしつつの学生生活である。

……とは言ったものの、働かざる者食うべからずなのは世の常だ。地球は回っても、金は回らず、就職難も続いていくのだ。回ればいいというものでもないが……。

少し夜風に当たりたくなつた清二は、不満の種である窓を引いた。少し涼やかな風が部屋の中に吹き込んだ。肌寒くもあるが、暖房で完備した清二の部屋にはちょうどいい塩梅となつた。

「やっぱ、囲炉裏だよなー暖房器具は……。」

こんなふう^{ふう}に清二は自分の環境に難癖をつけることが多かった。自分が寒いから電気ストーブをかってきて、体が温まればこのような愚痴を吐く。そのようなことからか、世間一般に対しても清二の受けは良くなかった。当然友達と言える者も数少ない。

すこし冷えてきたので、窓を閉め、清二は布団くるまに包まる。最近清

二は慢性的に眠気に襲われている。眠気は作業効率を低下させる要因になるので、明日に持ち越さないように心掛けている。明日が休みということを利用し、作品を書くこととしていたが、眠気の誘う状態で作品が書ける訳もなく、明日早朝に執筆活動をしようとして渋々床に就くことにした。

早朝、なにかに安眠を妨げられることもなく、清二は目を覚ました。

「ん〜」

清二は深く蹴伸びをし、朝の到来を自身で告げるように大きな欠伸をした。すがすがしい朝だと外を見てみれば、もう陽射しは清二の事を見下していた。どうやら少し寝すぎたようだ。休日の最初からスケジュールを誤ってしまうのはあまりいい気分ではない。時計を注視すると10時を回っていた。やはり目覚ましはセットしておかないとなと清二は少し後悔した。腹が減っていた訳ではなかったので、ご飯は朝昼兼用で済ませることにした。

まずは執筆だ・・・朝の分を取り返さないと・・・。

誰に強制されるわけでもないにも関わらず、訳のわからない強制力に引き寄せられるまま、清二は自分の作業台へと向かって行った。席に着き、右斜め前の筆入れから一本の万年筆を取り出し、前回の小説の続きから、自分が練りに練ったアイデアを、その拙い脳で表現するままに書き殴った。

清二という青年は読書家であったが、小説家ではない。小説を書

くのは好きでよくやっているが、発想や文体や言葉の使いまわし、表現等が他の作家の真似であるため、オリジナリティーを出せずにいる。これは、小説を書くというよりは、贋作を作る……いや、それにも劣る行為をまるで自己満足の様に清二は繰り返しているようであった。分かりやすく例を言えば、知った知識を知らない人に自慢気にひけらかすようなものに近いのかもしれない。一つ違いを挙げるとすれば、作品を自分の内に秘めて人に見せないということだろうか。

清二はこのところ、このような制作活動の模倣を行う事が多くなった。一種の自己憐憫から来る現実逃避なのかもしれない。それでも清二にとって、作品を制作することはライフワークの一部となっていた。

突然、インクが万年筆からでなくなった。清二は万年筆が壊れたのかと思い、万年筆を弄る。どうやらインクが切れたようだ。

「まいったなー。」

仕方がないので町に買いに行くことにした。そのついでに昼食を済ませよう。あくまでインクを買いに行くついでにだ。清二は歯を磨き、服を着替えると、足早に町の方へと足を進めた。

清二の足はいつも電車である。郊外にでる際にはいつも電車を利用している。郊外の方に大学があるため、清二はいつも財布の中に定期を入れている。定期情報のはいったICカードだ。普通なら定期入れに入れるものだが、ずばらな性格からか清二は定期入れに入れることをしなかった。

電車を待っている間、閑静なプラットホームを眺めることは清二

の密かな楽しみである。この日の清二は朝の寝坊ですこし苛立っていた。そのため、この癒しの空間はいつもより効果的に清二を癒してくれていた。プラットホームを眺めながらコーヒーを飲めばもっと癒されると短絡的に思い、すぐその自販機へ。一般的なメーカーの自動販売機にコーヒーが何本か並んでいる。ブルーマウンテン、カフェラテ、ブラック・・・色々並んでいるコーヒーの中で飲めもしないブラックを購入。こういうのは気分が大事の清二にとって、味よりも空気なのである。

勢いよくプルトップをあけ、清二はコーヒーの匂いを嗅ぐ。コーヒー豆の薫り高い匂いが鼻孔を心地よく刺激する。この時の清二の頭の中にコーヒーのCMのワンシーンが展開される。清二は思った。これは焙煎仕込みのコーヒーだ。確認するように缶コーヒーを回してみるが、焙煎とは書かれていない。脳内のCM再生が終了し、早速コーヒーを口に含む。清二は苦いと思った。しかし、何度も言うが、清二にとっては味より雰囲気なのだ。コーヒーを飲み終わる頃に、ちょうど電車がホームに到着した。コーヒーと同じくらい苦い顔をひっさげて、清二は電車に乗車した。

郊外までは電車で45分のところにある。電車を降り、改札を抜ける。駅前にはバスが走り、噴水の周りにはカッパルの待ち合わせと思われる男女が見られるが、平日なので人は多くない。清二は寄り道をせず、羨望町へ向かうことにした。

羨望町は日本でも有数の本の町である。大型のブックマーケットの類はなく、ほとんどが古書店系統の店ばかりだ。あとは喫茶店、文房具屋、洋服店が少しあるくらいで、形容するなら古き良き時代の名残を孕んだ町である。

清二が羨望町に行く時、緊急の場合等では決してあり得ない。理由は簡単で、自分の目的の物を買う以外にも本を品定めするのに莫大な時間を要するからである。ひどい時では、9時に羨望町に着き、21時に家路に着くというくらいである。本屋を巡っているとそれくらいになるのかどうかは別として、彼は羨望町が好きなのだ。どことなく昔チックな空気、暖かい店主さん、癖になるパスタの店など、清二がこの町で長い間時間をつぶすのに足るものが羨望町には存在するのだ。以上の理由から清二は休日にはほとんどこの場所ですごす。清二の事を知らない羨望町の人は殆どいないと言われているくらいである。それがいい意味なのか悪い意味なのかはさておき・・・。

「次は〜羨望町〜羨望町です、お降りの際は・・・」

バス車内にアナウンスが流れる。どうやらもうすぐ到着のようだ。降りる準備をしながら窓から羨望町を眺める。何も変わらない、これこそが羨望町。それと言わしめるだけのモノが羨望町にはあるのだ。清二の胸は高鳴った。

バスが停車し、清二はそそくさと運賃箱の横のカードリーダーにICカードを通す。下車するとそこは羨望町。まるで古書の匂いがあるような町、そのような形容をしても決して違和感のない景観。ここに来ると清二は胸がどうしても躍ってしまうのだ。走りだしただい衝動を抑え、まずは近場の古書店へと足を運ぶことにした。

その古書店の看板には「武藤古書店」という看板が掲げられていた。躊躇することなく店内へと清二は入店していく。店内は年季の入った造りで、木の大黒柱が長年この店を支え続けてきた貫禄を見せるが如く立っている。

「源爺げんじい、いるー？」

清二がそう叫ぶと中から初老の男が顔を覗かせた。

「ああ、セイちゃんかい。今日もおやすみかい？」

中から出てきた老人は清二に気さくに話しかけてきた。右手には”はたき”を持ち、つい先程まで店内を掃除していたのか、書店の奥には今も埃が舞っている。

「えっと、例の本ある？今日さ、実はあまり時間がないんだよ。」

先ほどの執筆の続きがあるためなのか、清二は急いでいる旨を源爺と呼ばれる店主に伝えた。武藤源次むとうげんじは清二の言葉に理解を示し、カウンターの奥に戻ると、机の引き出しから一冊の本を取り出す。タイトルは”吾輩は羅生門である”となっており、ブックカバーをかけて清二に手渡した。

「3000円、ツケはなしな？」

清二は少し高いと思いつつも財布から3000円を出し、源次の手前にある釣銭受けに3000円を置いた。

「毎度あり、また来てね。」

清二は源次の方に向き直り、軽く会釈すると急ぎ足で店外へ。次に目指すは文房具屋、雰囲気を大事にする清二だが、急がなければまた他の店で時間をつぶし、気がついたときには夜になるという事になりかねない。それ故に町の景観を乱すように急ぐ、雰囲気が大

事でもそれ以上の目的があれば躊躇なく乱す、それが清二であった。

次に向かうは文房具店「アポロ」。色々な文房具と画材等を買っているアポロは、清二にとって武藤古書店に並ぶ馴染みの深い店だ。急げば2分ほどで店に着く。あの路地を曲がればアポロだ、そう思い清二が角を曲がったその時

「きゃっ！」

清二は思った。ああ、事実は小説より奇なりってのはこのことか。・・・なんで急いでいる時に限ってこうもトラブルに見舞われるんだ。・・・。思った時にはもう遅い、ぶつかった相手は持っていたスーパリーの袋の中身を盛大にまき散らして倒れた。清二も尻もちをつき倒れたが、すぐに体勢を立て直すと、ぶつかった相手に駆け寄った。どうやら女性とぶつかってしまったらしい。

「だ、大丈夫ですか！？すみません、自分が急いでたばかりに・・・」

女性が立ち上がるや否や、清二に向かっていきなり平手打ちをした。

あっけらかんとする清二に対して女性は高圧的な態度で斜に構えている。

「散らかった私の荷物・・・早く取ってくんない？そのくらいあたりまえなんじゃない？」

清二は言われるままに荷物をそそくさと袋の中に詰めると女性に手渡した。女性はひったくるように袋を奪うと中身確かめてヒステリックに叫んだ。

「ちよつとお！卵潰れてるじゃない！どうしてくれんのよお！」

”容姿端麗、正確に若干の難あり・・・。うむ、今回は俺が悪い。”率直にそう思う清二であった。とにかく早くこの状況を脱したいと思い、向こうの不満を聞くことに。

「すみません、卵以外に潰れてたりするものありますか？」

早めにこの場の解消を図るようにしたが、それを聞いた途端に女性はおヒステリックに怒鳴ってきた。

「ありますかじゃないわよ！！アンタなめてるの？ぶつかっておいて物の心配からするわけ！？」

女性は活火山のように憤慨し、それに対しての清二の感想は「今日は執筆は諦めよう」であった。

「全くその通りです。よろしかったらお詫びをしたいと思いますのですが、お暇はございますか？」

語弊のない言葉を選び、慎重に活火山の鎮静化に臨む。清二はしたことがないが、化石の発掘はこの作業と遜色ないほどに繊細で難しいのだろうなと夢想した。

「今からバイト。お詫びをするっていうのだったら、午後5時にこの先の「アンジュ」ってサ店に来て、それだけ。じゃあ私急ぐから！」

女性はそういうとそそくさとバイト先に向かって行った。待ち合

わせまでまだまだ時間がある。急がば回れとはまさにこのことをいうのだろうか。本屋巡りの時間ができたようだ。清二は気分変えて本屋巡りをすることにした。

つづく

アンジュにて

気分を切り替えて清二は町をぶらつくことにした。ふと気付けばまだお腹に何も入れてない事に気付き、先程の「アンジュ」という喫茶店に立ち寄ることにした。

「アンジュ」は羨望町内ではわりかし有名な喫茶店だ。というのも、喫茶店は羨望町には数店しか存在せず、飲食は羨望町では喫茶店でしかできない。味の良し悪しのこともあるだろう。「アンジュ」はそんな羨望町の中でも馴染みの客が比較的多い喫茶店で、清二も利用することが多い。「アンジュ」の売りはメニューの多様性もさることながら、パスタの味も好評であった。馴染みの客に「アンジュ」新作パスタを試してもらい、評判が良ければメニューとして出す。そんな運営が気に入られ、遠方から来る客も多い。

「アンジュ」に向かう途中の道で、清二は先程の女性の事を考えていた。女性のぶつかつたときの対応、初対面の者に殴られる理不尽、最近流行りの”小説のようなもの”で書かれているような展開が実際目の前で行われてしまったこと、そのような事を考えるうちに清二のいつもの悪い癖が出る。被害に遭ったのは”小説のようなもの”が流行ったからだとか、人間性の欠如したものが若者の間で流行るから早くから素養の悪い者が生まれるのだとか、話が明後日の方にいつてしまっているのである。実際に悪いのは自分と考えていても、それをはっきり自覚して自分の問題に定義しなおせる者は世の中を探してもそうはいない。人間は必ず己以外にも非があると考えがちな生き物だからだ。だが、清二の場合は典型的な責任転嫁人間なのである。最初は自分の非を詫びていても、それが二転三転し、自分は悪くないという事を主張しだすのだ。当然そのような考え方をしているものが結論に至ったところで解決せず、心のモヤモ

ヤを持ったままになるのは当たり前の話だ。清二も例に漏れず、心のモヤモヤを拭い去ることができないまま、ただ「アンジユ」への歩を進めていった。

「アンジユ」の店の前に着くと、いい匂いが漂ってきた。野菜や肉類を煮込んでいるスープのような匂い、この匂いを嗅ぐたびに清二は家での出来事を思い出す。幼少期、外出から帰ってくると部屋にはいい匂いが充満し、今夜はカレーだという期待を膨らませたなんてのは清二にとってはよくあることだった。母の「できたわよー」という合図とともに食卓へ向かう家族一同、その中でも清二は断トツの速さで食卓へ駆け込み、お気に入りの席を確保するのだった。が、そんな清二の眼前にはビーフシチュー。大好きなカレーではなく、ビーフシチューがそこにはあった。野菜や肉類を煮込んで、その後ルーを入れて完成のこの手の料理は、幼少期の清二を混乱させる悩みの種の一つであった。大のカレー好きな清二は、カレー以外の選択をした”食卓の裁判長官”に対して、本気で怒鳴った事があるほどである。そんな苦い経験も、昔を思い出す清二の楽しい思い出の一つだった。手軽に食べることができるカレーは現在の清二の一人暮らしを支えてくれる友である。しかし、その年月は清二からカレーを遠ざけてしまった。幼少期の清二にとってカレーは恋人であり、織姫と彦星のような関係であった。しかし、清二の相棒となってしまうた途端に、カレーという存在は恋人ではなくなったのである。これは一種の人間の恋愛観にも似ているのではないだろうか。などと考えつつも、清二にとってのカレーは好物であることには変わらないのであった。

「アンジユ」の店のドアを清二が開けると、小気味いい鐘の音が聞こえる。喫茶店にならどこにでもあるドアベルが鳴ったのだ。ドアベルの音に反応し、この喫茶店のマスターらしき男が清二の方を見た。

「いらつしゃ・・・おお、セイちゃんか、いらつしゃい。」

マスターがそう言うと、清二はマスターの方を向いて軽く会釈する。マスターは慣れた手つきで焙煎豆をコーヒーミルで挽いていた。店の前では食欲のそそるいい匂いがしていたが、店内に入れば先程飲んでいた缶コーヒーとは比べ物にならないほどの薰り高い匂いが漂っていた。店内は明るすぎない程度の照明で構成され、遮光カーテン等で光を調節されていた。昼でも夕方程の明るさであるのは、店のイメージ作りの一環で、マスターが喫茶店の雰囲気を大事にしているのが店内を見渡せば分かった。

清二はマスターの前のカウンター席に腰を下ろす。今まで緊張状態の続いていた彼の肉体は、ここに来てやっと安らぐことができたのである。そんな清二の様子を見て、マスターは一杯のコーヒーを無言と共に彼に差し出す。

「ありがとう、マスター。」

マスターの淹れてくれたコーヒーを軽く一口、口に含む。口の中に苦さと共に程よい甘み、ミルクのまろやかさが広がる。コーヒーの香りは強すぎず、鼻孔を用いて嗅ぐ香りと、口にコーヒーを入れた際の香りとのアプローチの違いを楽しむだけの余裕を与えてくれているそのコーヒーは、先程の飲んだ一般大衆の為に開発された販売機のソレとは一線を画す味わいとなっていた。コーヒーにただ砂糖やミルクを入れれば単純に飲みやすいコーヒーが出来上がるわけではなく、コーヒー豆の種類、濃さ、甘味料の分量まで、人の好みを押し量り淹れてくれるマスターを、清二は単純に尊敬していた。コーヒーの淹れ方や豆の種類についてのウンチクを知る、自分の好みを探る等は、趣味としてコーヒーを淹れている者ならば心得てい

るだろう。しかし、人の為に最善の選択をする事は並大抵のことではないのは、コーヒーを入れることだけでなく物事の全てに関連して難しい。淹れる事の出来る人間はそうはいないだろう。例えそれが商売だったとしてもだ。清二はコーヒーのカップをテーブルに置き、マスターの方を見た。マスターは髭を生やした所謂ダンディーなタイプの男だ。今年で28になるということらしいが、マスターの放つ雰囲気のせいか若干老けて見えるようである。

「やっぱり缶コーヒーとは全然違うんだねえ。」

清二の感心しながら言ったが、皿を洗っていたマスターは手を止めて清二の方へ向きかえった。エプロンで手を拭きながら軽く失笑気味であった。

「缶コーヒーと比べてもらいたくないな、一応これで食べてるんだから。」

清二は先程の言葉の誤りを詫び、コーヒーの続きを楽しむことにした。カップの中のコーヒーを飲み干すと、マスターにある質問を投げかけた。

「そうだ、マスター、よく缶コーヒーに焙煎なんて言葉が書いてあるけど、焙煎って具体的にどんなことするんです?」

マスターは清二の言葉に少し困惑していたが、すぐに取り繕って言った。

「んつとな、焙煎ってのはコーヒー豆をローストすることなんだよね。要は容器の中にコーヒー豆を入れて、容器を加熱するんだ。コーヒー豆ってのはもともとこんな黒くなくて、この黒い豆の状態は

あくまで焙煎後の姿なんだ。」

そうとうと焙煎前の豆と焙煎後の豆をマスターが取り出してきて清二に見せる。清二は珍しい者でも見るかのような目で豆をまじまじと見ていた。

「それにしてもセイちゃん読書家なんていつてるから博学かと思っただけ、まさかの浅学だったとはね。」

マスターの言葉に少しムツときたが、先程の缶コーヒーに対して自慢げに焙煎だなくなんて言っていた自分を思い出し、すぐに押し黙った。

「そうは言っけどマスター、読書家だって人だ。知らない事は知らないとはつきり主張するだけ、まだ自分はマシだと思っんですよ。」

マスターに反論する清二の体は心なしに小さく見えた。

「もつと大きな視野を持てばいいんだよ。そしたら浅学なんかに成らずに済むさ。そういえば、セイちゃん昔の書物ばかり読んでるんだってね？最近のモノが嫌いで昔のモノを好む。温故知新なんて言うが、それは新しきを軽視すればよいなんて考え方を言っているわけじゃないんだよ？後ろを見てばかりじゃ、前は見れない。そういうことさ。」

マスターはなんの気なしに言ったつもりだったが、清二は思うところがあり、心にぐさつと来てしまった。清二自身、今の状況は昔を顧みることばかりしている。それでは駄目だと分かっている、人間の本質はそんな簡単に変えられるものではない。最近妙に気分が悪いのも若干そのことを気にしているということから来ているのかも

しない。

「分かってるんです、なんとなく気持ちが悪く前を向かないんですよ。新しきものは過去の劣化物にしか見えないし、前を見たところでその先に道があるとも限らないし。どうしても建設的に見えないというか。だから昔に固執してしまうというか。」

清二はどう言葉にしていにか分からず、しどろもどろで言葉をつないでゆく。

「セイちゃん、僕もね、昔そんな風に考えてた時があったのさ。」

マスターは顔をしかめながら話そうとした。マスターが話そうとした話は、遠くもない過去の出来事のことであった。しかし、自分を語ることを嫌うマスターは、すぐに話すのをやめ、顔を下に逸らした。顔を上げ、取り繕った後のマスターの顔は普段と変わらないように見えたが、どこか影があり、遠くを見つめていた。そんなマスターを見て、清二は思っていたことを口にするのをやめる。

「話は飛ばけどさ、若者なんてのはな、未熟なんだ。色々な面でな。マニュアル人間なんて奴、人の世の中にはいない。みんなそれぞれ思う事があって生きているんだ。一見苦悩のなさそうな奴ほど苦悩があり、苦悩がある奴ほど隠そうとする。そうして生きているうちになんとなくなるなんてことは決してないんだ。自分の中に進むという覚悟がある者のみが現状を打破できる。若者の時に固定観念を植え付けることは、自分を殺すことと同義だよ?」

マスターだつて若い、それでも清二よりは人生の先輩だ。マスターはマスターなりに言いたいことがあったのだらう。これは実質説教なのだらうが、若いマスターに言われてもいまいち説教のような

感じがしないというのが清二の率直な感想であった。

「若者には時間がある。歩くのをやめて広い視野を持てば、そのうち苦悩が晴れるというものだ。歳をとったらできないことだ。今のうちに悩んでおけば、年取った時に挫折も少なくなるもんだ。僕も昔はそうだったしね。」

マスターは昔を語らない。だが苦勞したという前提話はよくする。マスター曰く「苦勞を話した時点でそれは苦勞話ではない」らしい。どうということなのかはマスターの人生観から推察するしかないのだが、昔を語らないマスターの人生観を伺い知ることなど出来ず、清二は話題を変えることにした。

「それよりさマスター、恵理さんはどっかいつてるんです？ 厨房の方には見えないようだけど。」

「アンジュ」の店内は、カウンター席から厨房が見渡せるようになっており、厨房で料理ができる工程を除くことができる。といってもマスターが客の話し相手になっているので厨房を覗くことはあまりない。恵理とは、「アンジュ」で働いているバイトの子で、厨房で下処理や調理をする他、店の仕事全般を行っている。

「ああ、恵理ちゃんならちよつと近所へお使いに行ってるよ。寝たきりの人の元へ料理を届けてくれてるんだ。」

「へえ、デリバリーも始めたんですか？」

前に来た時にはそんなサービスをしていなかったなので、少し驚きながら清二は聞いた。

「ああ、そんなんじゃないんだ。デリバリーって言っても寝たきりの人だけに特別にすることにしててね。」

毎度マスターの献身的な経営方針には頭が下がる。事業福祉なんて昔の経営方針を今も守るなんて、自分にはとてもできない事だと清二は思った。

「マスターはすごいなあ。ホントに。今の世の中なんてさ、悪いこととした奴だけが大成するなんて思ってたけど、マスターを見てると妄想なんじゃないかと思うぐらいだよ。」

「大成なんてしてないさ。小さな喫茶店のマスターで大成してるなんていったら、僕の友達に笑われちゃうよ。」

価値観の違いを享受する事が大人なのであれば、今のマスターは大人なのだろう。マスターの友達がどう言おうが、今の世の中で自分の店を持つことがどのくらい難しいか、清二のような者でも少しは心得ていた。色々な価値観があるが、今のマスターは清二に尊敬を抱かせるに足る人物として成っていた。

「マスターにとって、尊敬される人物になるってのは、大成することにはいらんないの？」

少し考えたところで清二の言わんとしていることがわかったのか、少し照れた。

「ありがとう、分かったよ。じゃあもつと大成できるように頑張る。」

ドアベルが鳴り、ドアが開く。その方を清二が見ると、どうやら

恵理が帰ってきたようだ。先程まで料理の入っていたであろう出前箱をテーブルに置くと恵理は一息ついた。

「マスター、出前の方終わりましたー。」

マスターの方を向き直り、恵理が報告を済ませると清二のことに気付いたのか、元気な声で清二に挨拶をした。

「あ、清二さん、いらっしやーい。今日は羨望町にどんな御用？」

安田恵理は高校卒業後、出店したいという夢をかなえる為、今は資金集めの為にバイトを行っている。馴染みばかりが集まる店なので、紅一点の恵理は、店の看板娘であった。

「いや、それが万年筆のインクを買いに来ただけだね、ちょっとトラブルっちゃってさ。午後5時にこの店で待ち合わせる事になってるんだ。」

その話をマスターが聞くと、少し不安そうな顔をした。

「おいおい、頼むから店で野暮起こさないでおくれよ。」

そういう清二は手で落ちつけのジェスチャーをだした。

「わかってるってマスター。っと、今で思い出した、俺インク買わないといけなかったんだ。」

先程のトラブルで忘れていたインク購入を思い出し、清二は席を立った。

「あ、コーヒーの分はまた後で来た時に払うからツケといてよ。」

その言葉を聞くや否や、マスターは酸っぱい顔で顔を横に振った。

「そんな歳でツケを覚えたら口クな大人にならんよ、僕の奢りだから心配しなさんな。」

マスターが愛想笑いをしながら言う。清二はまた説教をくらないと思いい、清二は黙ってコクリと頷いた。

「また寄ってくださいね？トラブルはいけませんよ？」

最後に恵理の注意が入り、清二はコーヒー代分のお叱りを受けて店を出た。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2812s/>

変愛小説の上で

2011年10月8日23時22分発行